2024 年入学式 式辞

新入生の皆さん、桜咲くこの神奈川大学、そして神奈川大学大学院へのご入学、誠におめでとうございます。皆さんはもちろん、ご家族やご関係の皆様のお喜びもひとしおのことと存じます。神奈川大学のすべての教職員、そして1万3千人を超えるすべての在学生は、新入生の皆さんを心より歓迎いたします。

さて、本学は現在「YOKOHAMAの神奈川大学」として、新たな歴史を築き上げようとしています。昨年4月に理学部がひらつかキャンパスから横浜キャンパスに移転したことで、横浜の地を拠点とする2つのキャンパス「横浜キャンパス」「みなとみらいキャンパス」で教育研究活動を展開することとなりました。「YOKOHAMAの神奈川大学」の始まりです。

横浜キャンパスは、開学の地 桜木町から六角橋に移転以降90余年来、宮面が丘の地にあり、本学の開学当時からある法学部と経済学部、そして人間科学部の文系3学部、また理工系では工学部と理学部、そして一昨年に新設された建築学部、昨年に新設された化学生命学部及び情報学部の5学部という本学の新旧の歴史を織り交ぜた8学部が置かれています。

そして、みなとみらいキャンパスは、3年前に開設された新しいキャンパスです。そこには、経営学部、外国語学部、そして、国際日本学部の3学部が置かれています。この3つの学部のあるみなとみらいキャンパスでは、開港の地 横浜みなとみらい地区から、海洋を通じて日本の産業や文化、伝統などを世界につなげるという地域のコンセプトに合致した教育研究を展開しています。それは、国際的な教育に力を入れていることです。外国語学部はもちろんのこと、いずれの学部も外国人の教員が多いことにより、外国語だけでなく外国の文化を積極的に学ぶことができます。

また、海外の学術交流協定校に、この3つの学部から特に多くの学生が交換留学生として派遣されています。ちなみに、本学の海外の協定校は、現在221校あります。私は、すべての新入生の方々に、視野を拡げ、知見を得るためにも、在学中に留学されることをお勧めします。

さらに、海外の協定校からも本学に毎年百数十名の交換留学生がみえています。本学に在籍する留学生も、500名を超えており、さまざまな国の学生が集い、国際色豊かな本学で、海外からの留学生との交流を積極的に図り、友情を深めてください。

2つのキャンパスは、同じ横浜市内のほど近い距離にあります。一方は湾岸から、また一方は陵（おか）の上から、大海原の向こうにある広い世界に目を向けています。自身が所属していないキャンパスの授業を受けたり、図書館を活用したり、さらにはサークルや課外活動に参加するなどして、仲間作りに励んで下さい。2つのキャンパスを1つのキャンパスと考え、本学との「絆」を築いていただきたいと切に願っています。

神奈川大学は、4年後の2028年に創立百周年を迎えます。それに向けた将来像の冒頭には「海により開かれ、世界との接点となった横浜に生まれた本学園」という言葉が記されています。この言葉からもわかるように、海は世界を隔てるものではなく世界をつなげているものであり、本学は、横浜という地の利を受け、「海」により世界とつながっているのです。

まず、「海」に関わる研究と教育に注目しますと、工学部の由井明紀教授は、海中での太陽光発電を研究されています。海水による冷却効果で、太陽光発電の発電効率を高めるシステムの研究ですが、それだけでなく、太陽光発電システムを広い海中に設置できれば格段にこのシステムが広がります。現在、横浜市と提携して、横浜港で実験中です。また、昨年、横浜市や海洋都市横浜うみ協議会等が共催している、海と産業革新コンベンションとして「うみコン2023」が行われましたが、本学の海とみなと研究所や工学部の土屋健伸教授などが参加して、海上風力発電について発表されています。

このように海は、私たち人間に様々な自然の恵みをもたらす大切なものであることは誰もが知るところですが、ひとたび嵐が起こると水害をもたらし、大地震が発生すると、津波によって大きな災害をもたらすこともあります。13年前に発生した「東日本大震災」においては、津波による未曽有の被害が発生し、今回の「令和6年能登半島地震」においても、津波によって大きな被害が起きたことは皆さんご承知の通りです。今回の令和6年能登半島地震では直接的な津波の被害はありませんでしたが、奥能登の輪島市にある国の重要文化財である上時国家の古民家が倒壊しました。時国家は、平家の末裔が築いた、能登でも一番の名家です。そこには、中世からの文書もたくさん残されています。その文書の保存整理と分析を、神奈川大学の日本常民文化研究所が行ってきました。元本学の教授で、この研究所で中心的な研究をされていた、中世日本の歴史研究家である網野善彦先生は、海から歴史を見直すことで新たな日本史の解釈を構築されました。

奥能登は、中央からはずれた辺境にあり、中世から今に至るまで田畑の少ない貧しい地域だと考えられてきました。江戸時代初期には、時国家は200人ほどの家人、つまり家来を持っていました。

しかし、当時の古文書を分析すると、田畑を多く所有してしなかったため、そこに暮らす人々は「水呑百姓」とされていましたが、実は大商人であったり、大きな廻船をもつ裕福な家柄であったりしました。時国家も千石積の北前船を4艘も持ち、大量の塩を作り、材木を切り出し、炭を焼き、大阪から北海道や樺太まで活発な交易を行っていたマルチ企業だったことが分かりました。農地で働く農民だけを見るのではなく、海の民、職人や芸人、漂流民など幅広い人々をみることで、網野先生は日本史を幅広くとらえました。かの宮崎駿氏が、映画『もののけ姫』を製作する過程で、農業以外を生業とする庶民を描くにあたり、「網野歴史観」の影響を受けたことは有名な話です。

ご紹介したように、本学は、海に関わる研究も数多く行われています。それだけではなく、多様な価値観の共存する現代社会にあって、人の交流と文化の融和、知識と実践の循環、教育と研究の融合による21世紀における「真の実学」を実現し、神奈川大学は地域社会そして地球規模の課題解決を目指してまいります。

最後になりますが、本日入学された皆さんは、大学や大学院で学ぶという新しい環境に対する期待に胸を大きく膨らませていると思います。一方で、大きな不安も抱えているのではないでしょうか。本学はそのような皆さんの気持ちに寄り添い、できる限りの支援をしてまいります。ぜひ、すべての教職員、すべての先輩たちと共に、未来の神奈川大学を創り上げていきましょう。

すべての新入生の皆さんが、実りの多い学生生活を過ごされることを心より祈念いたしまして、式辞といたします。

2024年4月3日

神奈川大学長
　小熊　誠